様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22年 6月15日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間： 2008～2009
課題番号： 20730433
研究課題名（和文） 人を形容するときの「ふつう」の望ましさ：個人の価値と世間の価値の推測
研究課題名（英文） Empirical Studies on connotations of “ordinariness”: Personal value and estimations of compatriots’ value

研究代表者
大橋 恵 （OHASHI MEGUMI）
東京未来大学・こども心理学部・講師
研究者番号：30454185

研究成果の概要（和文）：

日本人が伝統的に重んじてきたと思われる価値「ふつう」について、世間の価値観として認識され続けているために行動に影響するが、実は誰ももう「ふつうさ」にあまり価値をおいていないという形で存在しているのではないかと考えた。本研究では、まず、この現象をシナリオ法を用いた大学生対象の調査で確認した。また、集団圧力の影響を受けやすいといわれている小中学生も、彼らの年代でも上述の乖離が認められる否か、および、「ふつう」を望ましくとらえる程度に関する発達的変化を探るため、小学校高学年・中学生・大学生対象にシンプルな質問を用いた調査を行った。その結果、シナリオ法を用いた場合は乖離が見られるが、質問文で尋ねる場合は乖離が消失していた。これに加え、小学校高学年・中学生は大学生に比べ、「ふつう」をより望ましくとらえるという年代差があることが示された。
さらに、何をもって人を「ふつう」「ふつうではない」と判断しているのか調べるために、中学生・大学生対象に、自由記述式の調査を行った。その結果、性格やその表れと考えられる行動パターンをもってふつうかふつうではないかの判断を行う者が多く、能力や外見は挙げられることはあったが多くはないことがわかった。

研究成果の概要（英文）：

The author expects that culture might exert such an influence on people that those who do not hold traditional Japanese values still behave in a “Japanese-like” manner, because they wish to be accepted by other Japanese who they believe hold such ideals. Through surveys using the scenario method, it was demonstrated that Japanese university students, despite holding other personal ideals, believe that their compatriots value ordinariness. Using Likert-type scales, elementary and junior-high school students who face peer pressure were examined to ascertain whether they also show such discrepancy. They did not show any discrepancy, which might be a result of a modification in the questioning method. Elementary and junior-high school students had a more positive image of ordinariness and ordinary people than did university students.

In addition, a survey with a free-response format was conducted in junior-high schools and universities in order to reveal the judgment criteria for ordinariness. The results show that many students use personality traits and behavior patterns that reflect personality traits, while a few use individual abilities or outward appearance.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2008 年度	400,000	120,000	520,000
2009 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総 計	1,000,000	300,000	1,300,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育心理学・　学級集団・経営
キーワード：教育系心理学、ふつう、価値観

1. 研究開始当初の背景

心は根本的に社会的な産物であり、心理学の理論や方法を考えるためには文化的背景を考慮することが大切であることが近年再認識されつつある。この傾向は、欧米では人の心理の基礎的な性質だとされてきた現象や理論が、日本をはじめとするアジア諸国ではうまくあてはまらないという事実によるところが大きい。例えば、欧米では普遍的に見られる社会的比較における自己高揚のバイアスが日本をはじめとするアジアでは小さい或いは見られない。

文化的な背景といっても様々な面が考えられるが、日本人が欧米人と最も異なるのは、自分のどの面を改善したいと思うかではないか。つまり、欧米人が自分の得意な面を伸ばすように努力するのに対し、日本人は自分が不得意な面の改善を目指す。欧米のやりかたは人を個性化に導くのに対し、日本人のやりかたは人の平均化・「ふつう」化を導くだろう。実際に、日本人が儒教的な中庸の価値を重んじ、他の人と同じであることに価値を置くことは日本人文化論などでよく指摘される。

このような関心に基づき、これまでに、日本人の個人の将来予測を行う際に「ふつうさ」を過大視するバイアスの存在を示した（Ohashi & Yamaguchi、 2004；大橋、 2006）。大学生対象の質問紙研究・実験室実験及び無作為に選ばれた大人対象の郵送調査で一貫して、よくある出来事を自分は平均的な人よりも経験しやすく、稀な出来事を平均的な人よりも経験しにくいと予測するバイアスが見られた。将来の出来事の経験に関して自分がふつうだと考えるだけならば平均と同じになる筈なので、この結果は自己の「ふつうさ」を過大視するバイアスを示す。この研究は、日本人の相対的可能性推定を西洋モデルで判断することの限界を指摘し、日本人の個人の将来予測は欧米人とは違う意味で非現実的であること、つまり、「ふつう」の方向に歪む傾向があることを示した点で意義深い。

しかし、自分の「ふつうさ」を過大視する理由を明らかにした研究は未だない。「ふつう」を望ましくとらえており、その望ましい特徴を持っていたいと欲するからだと説明は可能だが、そもそもそのような自己高揚動機が日本人にあてはまらないという説もあり、十分な実証研究はない。日本人にとって「ふつうさ」はどのような意味を持つのだろうか。

2. 研究の目的

日本人が伝統的に重んじてきたと思われる価値「ふつう」について、著者は、現状の観察や先行研究から、世間の価値観（あるいは社会規範）として認識され続けているために行動に影響するが、実は誰ももう「ふつうさ」にあまり価値をおいていないという形（多元的無知状態）で存在しているのではないかと考えている。本研究では、まず、この現象の確認と、どのような特性を持つ人がどのような状況でこのような価値観のずれを生じさせやすいのかを検討した（方法・結果の(1)）。

また、集団圧力の影響を受けやすいといわれている小中学生の「ふつうさ」に対する意識を調べるために調査を行った。その目的は、彼らの年代でも上述の乖離が認められるのかどうかを検討することと、発達的変化を探ることにあった(2)。

さらに、「ふつう」という言葉には良い意味も悪い意味もあるが、人を形容する際には良い意味で使われることが多いことが示されている（大橋・山口、2004）。これは、日本の伝統的な価値観と「ふつう」が合致していることから理解できる。しかしながら、何をもって人を「ふつう」「ふつうではない」と判断しているのかは、これまで明らかにされてこなかった。国語辞典によれば「ふつう」の定義は、1)よくあること、2)中程度であることの 2 点であるが、人について「ふつうさ」を判断する際にはもっと具体的な基準があるのではないか。そこで、「ふつうの子」「ふつうではない子」の印象を尋ねる自由記述式の調査を行った(3)。

3. 研究の方法

(1) 大学生対象の調査

まず、「ふつう」について本人の考えと周りの人々の持つ考えについての推測に乖離があるのかどうかを調べるために、大学生 100 名を対象とした質問紙調査を行った。具体的には、予備調査で「ふつう」と評価された人物と「ふつうではない」と評価された人物について読ませ、全体的な印象や対人魅力を測定した。この際、二つの工夫をした。まず、「世間一般」が「自分より目上の人たち一般」を指すという先行研究での問題を回避するため、「クラスメイト」という語を使用し、同世代での他者の考えを推測させたこと。二つ目は、具体的でイメージしやすい測定法を用いたことである。

次に、大学生 80 名を対象に、制御焦点（動機づけの方向）を操作した上で、「ふつう」および「ふつうではない」人物についての記述を読ませ、評価させた。さらに、自尊心、「ふつう」に価値を置く程度、社会的自尊心等の個人差変数も測定し、探索的な検討を行った。

(2)小学生・中学生・大学生対象の調査

「ふつう」の望ましさの発達的変化を調査すると同時に、自分と周りの学生たちの考えのかい離を検討するために、集団圧力の影響を受けやすいといわれている小中学生の意識を調べ、大学生と比較した。小中学生 622 名および大学生 154 名を対象にアンケートを実施した。ふつうの望ましさは、「ふつうはほめ言葉か」と尋ね、そう思う(5)からそう思わない(1)までの 5 点尺度で回答を得た。その際、「自分にとって」「クラスメイトたちにとって」「世間一般で」の 3 種類に分けて望ましさを測定した。

(3) 中学生・大学生対象の調査

「ふつうの子」「ふつうではない子」のイメージ内容と判断基準を調べるため、選択式及び自由記述式の調査を行った。回答者は、東京都内の公立中学校の1、2年生440名および私立大学の2、3年生154名だった。

半分の回答者には同年代同性の「ふつうの子」、もう半分の回答者には同年代同性の「ふつうではない子」について考え、その特徴を表す言葉を自由に8つまで挙げさせた。次に、その子がふつう(又は、ふつうではない)と考える理由の記述も求めた。それから、「ふつうの人」「ふつうではない人」を記述させた先行研究(大橋・山口、2004)で頻繁に見られ、かつ日常語としてわかりやすいリッカート式の 10 項目を用いて評価を求めた。また、好意度も測定した。

4. 研究成果

(1)大学生対象の調査

「ふつうの人」に関しては回答者本人の評価よりも世間一般の評価の推測において対人魅力が高く、「ふつうではない人」に関しては回答者本人の評価よりも世間一般の評価の推測において低いという結果が得られた(交互作用効果が有意;$F(1, 221) = 165.78$, $p < .0001$)。これは世間一般では「ふつうさ」に価値が置かれてはいるが、自分はあまり置いていないというダブルスタンダードの存在を意味する。

この傾向が強い人がどのような特徴を持つのかについては、あまり明確な関連変数が見出されなかった。

「ふつう」「ふつうではない」人物の印象が、制御焦点(動機づけの方向)によってどのように異なるかを、大学生約 80 名対象の質問紙実験によって検討した。具体的には、まず自分の理想(促進焦点)または義務(回避焦点)を書かせた後、予備調査において「ふつう」と評価された人物と「ふつうではない」と評価された人物について読ませ、全体的な印象や対人魅力・クラスメイトからの評価の推測を測定した。その結果、「ふつう」の人を、自分はあまり望ましいとは思わないがクラスメイトたちは望ましいと思われていると考える傾向が再び見られた($F(1, 75) = 112.79$, $p < .0001$)。ただし、性別との交互作用効果が有意で、男性のほうがふつうではない人物に対する自分とクラスメイトとの評価の差を大きくとらえているというパターンであった(図1;$F(1, 75) = 10.96$, $p < .001$)。一方、実験操作の影響は認められなかった($F(1, 75) < 1$, *n.s.*)。

個人差変数との相関を検討した結果、社会的自尊心が高い人ほどふつうの学生を個人的に好ましいと評価し($r = .25$, $p < .05$)、自尊心が高い人ほどふつうではない学生を個人的に好ましいと評価していた($r = .32$, $p < .01$)。クラスメイトの考えについては、自尊心や社会的自尊心との相関は認められなかった($r < |.2|$, *n.s.*)。

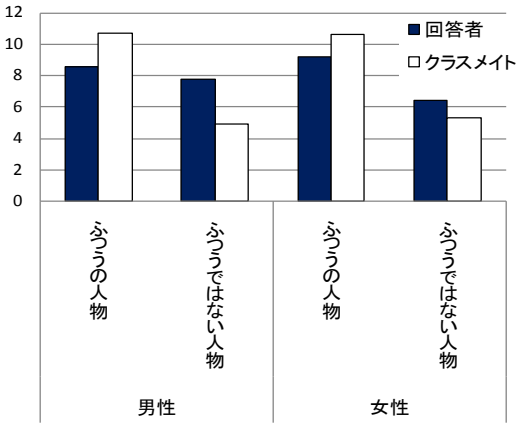

図1 回答者とクラスメイトの好意度

(2)小学生・中学生・大学生対象の調査

各質問について、学年(5)×性別(2)の2要因分散分析を行った。その結果、自分をふつうだと認知する程度については、自分をふつうだとみなす傾向は、発達に伴い弱くなり($F(4, 704) = 3.07$, $p < .05$)、小学5年生と中学2年生、大学生の間に有意な差があった。また、女性のほうが男性よりも自分を有意によりふつうだとみなしていた($F(1, 704) = 5.54$, $p < .05$)。

次に、ふつうの望ましさに関して同様に 2 要因分散分析を行ったところ、同級生にとっての「ふつう」の望ましさの推測には学年の有意な主効果が認められた($F(4, 704) = 5.57$, $p < .0001$)。具体的には、小学 6 年生と中学生は、小学 5 年生および大学生よりも有意に肯定的に回答した($F(4, 704) = 2.75$, $p < .05$)。また、世間一般での望ましさの推測についても学年の主効果が有意であり($F(4, 470) = 5.39$, $p < .0001$)、小学5年生よりも中学生及び大学生で有意に肯定的だった。自分と同級生の差は有意ではなかった。

自分は「ふつう」をあまり望ましいとは思わないが世間では望ましいと思われていると考える乖

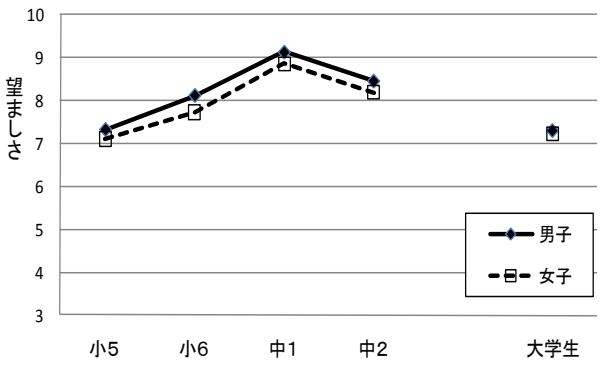

図2「ふつう」の望ましさ(3項目合計)の学年別平均値

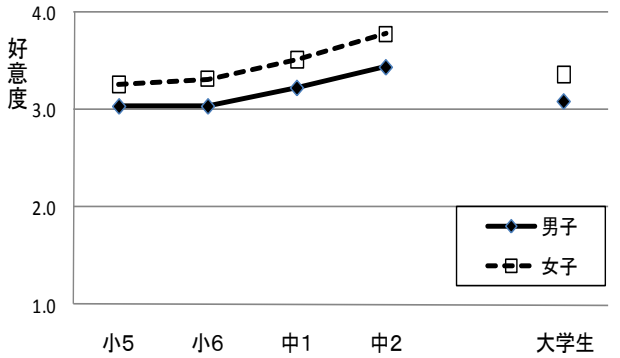

図3「ふつうの子」に対する好意度の学年別平均値

離が、本研究においては見られなかった。これに対し、先行研究(Ohashi、 2007)では9件法を使っているのに対し、今回はより差が検出しにくい5件法で測定したから差異が検出されにくくなったという解釈が挙げられるが、今回の大学生の平均値を見る限りこの解釈は当てはまらない。また、先行研究では「ふつうの人」といったときの「ふつう」は良い意味かそれとも悪い意味かと尋ねたのに対し、今回は小学生に対するわかりやすさを考慮し「ふつうはほめ言葉か」という質問文を用いたことも理由の一つであろう。「ふつう」はほめ言葉ではないが、良い意味ではあるということもありえる。価値観を測定する際には用語の選択が大事であることもまた、この研究から示唆される。

ふつうの望ましさに見られた学年差(図2)およびふつうの子への好意度に見られた学年差(図3)から、「ふつう」が望ましいという感覚は、小学校から中学校の間に育っていくことが示唆される。そして自我同一性が確立されてくる大学生では「ふつう」をそこまで望ましいと考えなくなるという変化も見られた。

また、女性のほうが男性よりも「ふつう」の子に対して好意的であった。女性は自分をふつうだとみなす傾向も男性よりも強かった。これらの結果は、女性のほうが対人関係に配慮するように育てられるという先行研究の知見と一致している。つまり、他の人たちとの関係で「ふつう」にふるまうことが女性において高く評価されるということを示すのではないか。ただ、本研究においては同性の「ふつう」の子について考えるように指示したため、本研究で見られた性差が、男性よりも女性がより「ふつう」の子を好むことを意味するのか、女性の「ふつう」の女性のほうが「ふつう」の男性よりも好かれることを意味するのか、不明である。

(3) 中学生・大学生対象の調査:

数値データ

まず、好意度を従属変数として、年齢層(2)×

表1 年齢層と条件、性別ごとの平均値(標準偏差)

		親切さ		面白さ		思いやり		物知り		温かさ	
年齢層	性別	ふつう	ふつうではない	ふつう	ふつうではない	ふつう	ふつうではない	ふつう	ふつうではない	ふつう	ふつうではない
中学生	男性	3.48	2.65	3.29	3.07	3.57	2.49	3.22	2.92	3.51	2.63
		(0.88)	(1.26)	(0.92)	(1.41)	(0.83)	(1.21)	(0.78)	(1.26)	(0.83)	(1.19)
	女性	3.60	2.52	3.43	2.59	3.71	2.51	3.23	2.61	3.62	2.55
		(0.71)	(1.18)	(0.73)	(1.35)	(0.79)	(1.27)	(0.62)	(1.08)	(0.79)	(1.17)
大学生	男性	3.39	2.78	3.30	3.04	3.70	2.87	3.13	3.09	3.35	2.83
		(1.34)	(1.48)	(1.36)	(1.22)	(1.77)	(1.69)	(1.39)	(1.20)	(1.40)	(1.23)
	女性	3.57	2.96	3.48	3.19	3.48	2.69	3.13	3.12	3.52	2.92
		(1.34)	(1.87)	(1.31)	(1.79)	(0.73)	(1.93)	(0.69)	(1.66)	(0.67)	(1.70)

		明るさ		きちんと度		自信		頼もしさ		目立ちたがり	
年齢層	性別	ふつう	ふつうではない	ふつう	ふつうではない	ふつう	ふつうではない	ふつう	ふつうではない	ふつう	ふつうではない
中学生	男性	3.63	3.10	3.57	2.54	3.17	3.06	3.41	2.41	2.83	3.29
		(0.94)	(1.45)	(0.88)	(1.25)	(0.84)	(1.35)	(0.87)	(1.40)	(0.92)	(1.47)
	女性	3.80	2.71	3.65	2.63	3.18	2.93	3.55	2.13	2.79	2.69
		(0.80)	(1.46)	(0.65)	(1.16)	(0.71)	(1.27)	(0.79)	(1.21)	(0.69)	(1.46)
大学生	男性	3.43	3.26	3.43	3.22	3.00	3.91	3.22	2.74	2.83	3.30
		(1.34)	(1.45)	(1.56)	(1.86)	(1.54)	(1.59)	(1.38)	(1.79)	(1.56)	(1.96)
	女性	3.52	3.31	3.43	3.31	2.91	3.50	3.13	3.08	2.57	3.54
		(0.73)	(1.83)	(0.73)	(1.81)	(0.73)	(1.77)	(0.97)	(1.92)	(0.79)	(1.79)

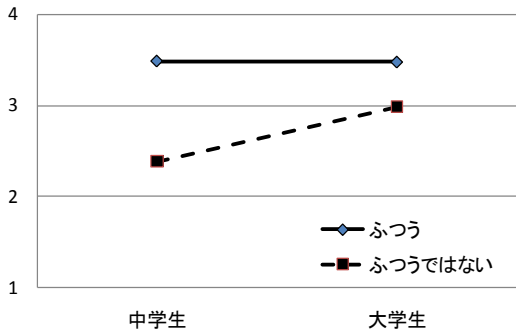

図4「ふつうの子」「ふつうではない子」への好意度

条件(2)×性別(2)の 3 要因分散分析を行った。その結果、年齢層と条件の有意な主効果(F(1, 522) = 4.43, p < .05; F(1, 522) = 33.15, p<.001)に加え、年齢層と条件の有意な交互作用効果(F(1, 522) = 4.80, p < .05)が見られた。これは、「ふつうの子」のほうが「ふつうではない子」よりも有意に好かれているが、その違いの大きさは中学生で顕著であることを意味する(図4)。差のt検定によれば、大学生でのふつうではない条件以外は中点(3)からの差が有意であった。

次に、10 項目で測定した印象についてだが、探索的な因子分析の結果、条件間でまとまり方が一致していなかった。そこで、質問毎に、年齢層(2)×条件(2)×性別(2)の 3 要因分散分析を行った(条件別平均値を表 1 に記す)。

すると、「ふつうの子」は「ふつうではない子」よりも、より親切で、より温かくて、より面白くて、より思いやりがあって、より物知りで、目立ちたがりやではない、とされていた。中学生では「ふつうの子」のほうが「ふつうではない子」よりも明るくて、きちんとしていて、頼もしいと判断されていたが、大学生ではこの傾向は小さい、あるいは見られなかった。また、中学生は「ふつうの子」は「ふつうではない子」よりも自信があると判断したが、大学生では逆だった。

また、質問紙の最後に尋ねた、自分をふつうだと認知する程度およびふつうの望ましさには、予期していなかった条件差が認められた。すなわち、自分がふつうだと思うかと尋ねたときに、年齢層・条件の主効果(F(1, 522) = 4.15, p < .05; F(1, 522) = 3.82, p < .05)および年齢層と条件の交互作用効果(F(1, 522) = 12.76, < .0001)が有意であった。これは、「ふつうではない子」について考えた後のほうが、「ふつうの子」について考えた後よりも自分をふつうであるとみなす傾向が大学生には見られたが、中学生にはこのような傾向は見られなかったことを意味する。

ふつうの望ましさに関する統計的検定の結果、大学生では、「ふつうではない子」について考えた後のほうが、「ふつうの子」について考えた後よりもふつうはほめ言葉だと考える傾向があったが、中学生にはこのような傾向は見られなかった。さらに、同級生にとってのふつうの望ましさの推測については、年齢層の主効果のみが有意であり(F(1,522) = 4.15,p < .05)、中学生のほうが同級生たちは「ふつう」をほめ言葉としてとらえていると考えがちであることが示された。

文化的価値が時代とともに変わっていることが指摘されている今、「ふつう」に価値を置く程度は低まっている可能性がある。しかし、本研究は、現在でも、人を形容する際の「ふつう」は「ふつうではない」よりも良い意味で使われることを示している。また、「ふつうではない」は中学生には否定的に捉えられていたが、青年期に当たる大学生はそれほどでもないという、年齢層による差が見られた。これは仲間集団が特に重要になるギャングエイジという発達段階にいるからだと解釈できる。

自由記述

本研究では、「ふつうの人」「ふつうではない人」についてその特徴を自由に記述してもらうことで、そのイメージする内容に迫った。コーディングについては、まず、筆者と研究協力者(大学院生)でコーディング表を検討した。その後、仮説を持たない学部生二名が全回答のコーディングを行い、この時点での一致率は.724 だった。一致しない回答については、筆者を含めた 3 名で協議の上決定した。

まず、「ふつうさ」の判断基準としてどのような領域が挙げられているのか概要を知るために、各サンプルで該当カテゴリーの回答を記入した生徒・学生の割合をまとめた(表 2)。その結果、大学生サンプルでも中学生サンプルでも共通して、能力(例えば、頭がよいとか走るのが遅い等)や身体的特徴(例えば、太っているとか身長が標準的等)を挙げる者は少なく、性格やその表れと考えられる行動パターンへ言及する者が

表2 各カテゴリーの回答を行った回答者の割合

	中学生(%)		大学生(%)	
ふつう条件	男性	女性	男性	女性
性格	36.5	37.6	18.8	12.9
対人行動	17.9	25.2	26.2	18.0
会話行動	6.0	7.6	6.7	6.7
その他の行動	9.1	11.1	22.8	37.1
活動	7.7	4.5	11.4	4.5
能力	12.4	6.2	6.7	7.3
身体	6.9	3.1	4.0	10.1
ふつうではない条件				
性格	17.8	22.2	19.4	19.1
対人行動	24.6	32.8	16.1	29.9
会話行動	1.5	4.7	4.3	4.5
その他の行動	28.9	25.6	28.0	26.8
活動	3.4	3.9	0.0	1.9
能力	14.8	7.8	15.1	7.6
身体	6.2	2.1	5.4	5.7

多いことが見受けられた。中でも、女性は、対人行動（例えば、非協力的である、一人で行動する等）を「ふつうではない子」の特徴として多く挙げられていた。中学生は、「ふつうの子」の特徴として、性格を大学生より多く挙げていた。詳細を見ると、落ち着いている・元気である・面白いなど多様な好ましい性格が記されており、「面白い」「楽しい」という回答の多さが意外であった。

次に、より具体的な特徴を探るために、詳細なコードを分析した。その際、結果が煩雑になること、および、回答欄は８つあったため８つすべてに記入した学生と1つのみ記入した学生の回答の重さに違いがあるとも考えられるため、第一回答のみの分析結果を報告する。

実際に使われたコード表は 77 コード（「非該当」を除く）あったが、これをまとめたものが表 3 である。その結果、中学生のイメージする「ふつうの子」は、元気で楽しい人であり、女子はこれに加えて、友達が多いや仲の良い友達がいる等友人関係の良好さへの言及が目立った。一方、大学生のイメージする「ふつうの子」は、ある程度会話がうまいことが重要で、社会性・協調性があり、頭脳が中程度で、障害がない人だった。女子ではこれに加えて、ファッションが重要な要因とされていた。

中学生のイメージする「ふつうではない子」は、暴力的で勉強ができず協調性に欠けていて自分とは異なる行動パターンを持つ人であった。

表3　第一回答の分析

			ふつう条件（%）				ふつうではない条件（%）				ふつう（平均）	ふつうではない（平均）
			中学生		大学生		中学生		大学生			
ラベル	プロパティ	ディメンション	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性		
性格	落ち着き、まじめ		7.4	4.9	2.9	0.0	6.3	7.6	3.0	7.3	3.8	6.1
	活発で目立つ		6.6	10.7	2.9	7.1	3.6	8.6	6.1	2.4	6.8	5.2
	面白い		15.7	6.8	2.9	2.4	4.5	2.9	6.1	4.9	7.0	4.6
	思いやりがある		5.8	7.8	0.0	4.8	0.9	1.9	0.0	0.0	4.6	0.7
	その他好まれる性格		0.8	2.9	2.9	0.0	0.0	1.0	0.0	0.0	1.7	0.2
	その他好まれない性格		0.0	1.0	0.0	0.0	2.7	5.7	3.0	2.4	0.2	3.5
	マイペース		0.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.0	2.4	0.2	1.4
対人行動	危険あり・有害		0.0	0.0	0.0	0.0	7.2	10.5	6.1	0.0	0.0	5.9
	社会性・社交性・協調性	高い	4.1	4.9	14.7	4.8	0.9	1.9	0.0	0.0	7.1	0.7
		低い	0.8	0.0	0.0	0.0	5.4	6.7	0.0	12.2	0.2	6.1
	自己主張・自主性	高い	2.5	1.9	0.0	0.0	0.0	0.0	3.0	0.0	1.1	0.8
		低い	0.0	1.0	0.0	2.4	0.0	1.0	0.0	0.0	0.8	0.2
	友達との関係	良好	6.6	16.5	8.8	7.1	0.9	1.0	0.0	0.0	9.8	0.5
		良好でない	0.0	0.0	0.0	0.0	3.6	1.0	0.0	4.9	0.0	2.4
	その他好まれる対人行動		4.1	2.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.8	0.0
	その他好まれない対人行動		0.0	0.0	0.0	0.0	2.7	1.0	0.0	4.9	0.0	2.1
会話行動	会話スキル	高い	1.7	2.9	0.0	0.0	0.0	1.0	3.0	2.4	1.1	1.6
		中程度	3.3	7.8	14.7	14.3	0.0	0.0	0.0	0.0	10.0	0.0
		低い	0.0	0.0	0.0	0.0	0.9	3.8	3.0	2.4	0.0	2.5
その他の行動	マナー・ルール	良い	2.5	1.0	0.0	2.4	0.0	0.0	0.0	0.0	1.5	0.0
		悪い	0.0	0.0	0.0	0.0	5.4	2.9	6.1	2.4	0.0	4.2
	ファッション	標準的	0.0	1.9	0.0	16.7	0.0	0.0	0.0	4.9	4.7	1.2
		標準的でない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.0	2.4	0.0	1.4
	感情	極端にある	0.0	0.0	0.0	0.0	1.8	1.9	3.0	4.9	0.0	2.9
		ある	0.0	0.0	5.9	0.0	0.0	1.0	0.0	0.0	1.5	0.2
		ない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.9	1.0	0.0	2.4	0.0	1.1
	常識	ある	2.5	1.9	2.9	4.8	0.0	0.0	0.0	0.0	3.0	0.0
		なし	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.9	0.0	2.4	0.0	1.1
	変わった言動をする		0.0	1.9	2.9	0.0	11.7	9.5	6.1	9.8	1.2	9.3
	好き嫌いが標準的ではない		0.0	0.0	0.0	4.8	1.8	1.0	6.1	0.0	1.2	2.2
	生活レベルが標準的ではない		2.5	1.0	0.0	2.4	0.9	0.0	0.0	2.4	1.5	0.8
活動	学校に来ない・勉強しない		2.5	0.0	0.0	2.4	3.6	3.8	0.0	0.0	1.2	1.9
	課外活動をしない・趣味がない		1.7	0.0	2.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.1	0.0
	日常生活	標準的でない	3.3	1.0	0.0	2.4	0.0	0.0	0.0	0.0	1.7	0.0
能力	頭脳		5.8	2.9	5.9	4.8	7.2	1.0	6.1	0.0	4.8	3.6
	運動能力		0.0	1.0	0.0	2.4	1.8	1.9	0.0	0.0	0.8	0.9
	その他の能力		0.0	1.0	0.0	0.0	2.7	1.9	9.1	4.9	0.2	4.6
身体	障害の有無		5.8	2.9	8.8	7.1	4.5	1.9	0.0	2.4	6.2	2.2
	身体的特徴		1.7	1.7	1.7	1.7	1.7	1.7	1.7	1.7	1.7	1.7
	容姿・スタイル		1.7	1.7	1.7	1.7	1.7	1.7	1.7	1.7	1.7	1.7

表4　第一回答のvalence

	中学生（%）		大学生（%）	
ふつう条件	男性	女性	男性	女性
肯定語	62.8	64.1	47.1	42.9
中立語	26.4	24.3	38.2	50.0
否定語	0.8	1.0	0.0	0.0
無回答・非該当回答者	9.9	10.7	14.7	7.1
ふつうではない条件				
肯定語	15.3	14.3	15.2	19.5
中立語	43.2	40.0	48.5	43.9
否定語	25.2	32.4	12.1	24.4
無回答・非該当回答者	16.2	13.3	24.2	12.2

男子大学生のイメージは中学生と似ていたが、女子大学生は、ファッションと社会性・社交性が重視な判断基準としていた。

さらに、人を形容する際の「ふつう」はやや肯定的に、「ふつうではない」はやや否定的に捉えられているという先行研究の知見（大橋・山口、2004）を再検討するため、第一回答として挙げられた特徴が、肯定語か否定語か中立語かで集計した（表 4）。その結果、「ふつうの子」については肯定語が最も多く、「ふつうではない子」については、中立語が最も多く挙げられていた。つまり、人を形容する「ふつう」はやや望ましい意味であることが、再び示された。これに加え、年齢層による差が見られた。中学生のほうが、大学生よりも「ふつうの子」をより肯定的に、「ふつうではない子」をより否定的にとられていることは、(2)の結果と共通しており、発達心理学的に理解できる。

最後に、ふつう・ふつうではないと考える理由についても尋ねていたが、あまり明確な回答は得られなかった（表5）。この件に関し、回答者たちは直観的な判断をしていることが伺える。

5．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）
①大橋　恵、「ふつう」の望ましさについての発達的変化−小学生・中学生・大学生の比較−、東京未来大学こども心理学部紀要、査読無、3 巻、2010、pp. 29－36.

〔学会発表〕（計 3 件）
①大橋　恵、「ふつう」の望ましさについての発達的変化−小学生・中学生・大学生の比較−、日本健康心理学会第 22 回大会、2009 年 9 月 7 日、東京
②大橋　恵、ふつうの子・ふつうではない子のイメージ−中学生・大学生の比較−、日本社会心理学会第 50 回大会・日本グループダイナミクス学会 56 回大会合同大会、2009 年 10 月 11 日、大阪
③大橋　恵、ふつうの子・ふつうではない子と判断する基準−中学生と大学生の自由記述から−、日本社会心理学会第 51 回大会、2009 年 9 月 17、18 日、広島（確定）

表5　ふつう・ふつうではないと考える理由

ふつう条件	中学生	大学生
極端に良くはない、極端に高くない	4	0
極端に悪くはない、極端に低くない	7	0
真ん中くらい、中程度	26	10
多くの人たちと同じ、似ている	47	27
自分と同じ、似ている	8	4
ふつうという言葉のイメージ	125	40
ふつうではないことへの言及	33	7
その他	24	0
ふつうではない条件	中学生	大学生
極端に良い、高い	17	3
極端に悪い、低い	5	2
極端に悪かったり、良かったり	3	1
多くの人たちと違う、似ていない	26	10
自分と違う、似ていない	13	8
ふつうではないことへの言及	140	39
ふつうという言葉のイメージ	21	6
その他	25	5

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕（計 0 件）

〔その他〕（計 0 件）

6．研究組織
(1)研究代表者
大橋　恵　（OHASHI MEGUMI）
東京未来大学・こども心理学部・講師
研究者番号：30454185

(2)研究分担者
（　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　）

研究者番号：

調査にご協力いただいた足立区 D 中学校、S 中学校、小金井市T大学、文京区 T 大学の皆様に感謝いたします。